

古文 敬語これだけ100

解答・決め手

答えより、**決め手の一行**を覚えてください。

丸つけのしかた 答えが合っていても、決め手が言えなければ×にしてください。

- ① **まず種類を決める** 尊敬（動作をする人を敬う）／謙譲（動作を受ける人を敬う）／丁寧（読み手・聞き手を敬う）。
- ② **誰から誰への敬意か** 地の文なら作者から、会話文なら話し手から。ここを取り違えると全部ずれます。
- ③ **訳を当てはめて確認** 「お～になる」なら尊敬、「～し申し上げる」なら謙譲、「～ます・～ございます」なら丁寧。

種類見分け 種類を答えよ。

1	中宮、昔のことを、おぼしめさせたまふ。	尊敬語（最高敬語）	「おぼしめす」＋「せたまふ」。
2	我れ、御いとまたまはる。	謙譲語	「たまはる」＝いただく。
3	「これは尊し」と申したまふ。	謙譲（申し）＋尊敬（たまふ）	「申す」＝言うの謙譲、「たまふ」＝動作主を敬う。
4	「我れも参り <u>侍</u> りぬ」と申す。	丁寧語	「侍り」＝～です・います。
5	「君にまうすべきこと侍り」と言ふ。	謙譲（まうす）＋丁寧（侍り）	「まうす（申す）」謙譲、「侍り」丁寧。
6	御前に候ひけり。	謙譲語（お控えする）	「御前に候ふ」＝貴人のおそばに伺候する謙譲の本動詞。
7	大納言、御前に候ふ。	謙譲語（御前に伺候する）	「御前に」＋地の文＝貴人のそばに控える謙譲。丁寧語は会話・手紙が原則。
8	中宮、御文を奉る。 種類と敬意の対象を答えよ。	謙譲語／受け取り手（差し上げる相手）への敬意	「奉る」は謙譲。差し上げる相手を敬う。
9	中宮、御文奉りたまふ。 種類と敬意の対象を答えよ。	謙譲＋尊敬／受け取り手と中宮の両方を敬う	「奉り」＝謙譲、「たまふ」＝尊敬。
10	さぶらふ人召せ。	「さぶらふ」＝謙譲語（or 丁寧語の本動詞用法）／「召せ」＝尊敬語	「さぶらふ（候ふ）」＝「あり・仕ふ」の謙譲語（お仕えする）。
11	「侍に候ふは誰そ」と仰す。	丁寧／謙譲（「候ふ」）＋尊敬（「仰す」）	「候ふ」は文脈で謙譲・丁寧を判別。
12	大臣、帝に文を奉りたまふ。 敬意の方向（誰から誰へ）を答えよ。	「奉り」＝大臣から帝への敬意（謙譲）／「たまふ」＝作者から大臣への敬意（尊敬）	謙譲は動作主から受け取り手へ、尊敬は作者（語り手）から動作主への敬意。
13	中宮、御文を御覧じたまふ。 敬意の方向を答えよ。	「御覧じ」＋「たまふ」ともに作者から中宮への尊敬（二重敬語）	尊敬の重ね＝最高敬語。
14	「我れ、参り <u>侍</u> り」と申す。 敬意の方向を答えよ。	「侍り」＝話し手から聞き手（高貴な人）への丁寧	会話文の中の丁寧語は聞き手敬意。

訳し方 現代語訳せよ。

15	院、大殿籠る。	「院が、お休みになる」	「大殿籠る」尊敬の特殊形（寝る）。
16	帝、御文書かせたまふ。	「帝が、お手紙をお書きになる」	「せたまふ」二重敬語（尊敬）。
17	御文を奉る。	「お手紙を差し上げる」	「奉る」謙譲。「差し上げる」。
18	「これは尊し」と申す。	「『これは尊い』と申し上げる」	「申す」謙譲。「申し上げる」。

19	我れも参り侍り。	「私も参上いたします（ございます）」	「侍り」丁寧。「～います／いたします／ございます」。
20	中宮、御文を御覧ず。	「中宮が、お手紙をご覧になる」	「御覧ず」尊敬。「ご覧になる」。
21	御所に参る。	「御所に参上する」	「参る」謙譲。「参上する」。
22	法皇、熊野へ御幸あり。	「法皇が、熊野へ御幸をなさる（おいでになる）」	御幸（ごこう）＝上皇・法皇のお出まし。帝なら行幸（ぎょうこう）。
23	君に仕うまつる。	「君にお仕えする（お仕え申し上げる）」	「仕うまつる」謙譲。
24	上、仰せらる。	「上が、おっしゃる」	「仰す」＋「らる」（尊敬）。
25	大納言、御前に候ふ。	「大納言が、御前に控えている／お仕えしている」	「候ふ」（謙譲）。
26	帝、御物の怪に苦しませたまふ。	「帝が、物の怪にお苦しみになる」	「せたまふ」二重敬語（尊敬）。

敬意の方向

敬意の方向を答えよ。

27	（地の文）帝、御文書かせたまふ。	作者 → 帝	地の文の尊敬二重敬語。動作主の帝を作者が敬う。
28	（地の文）中宮、御髪を梳らせたまふ。	作者 → 中宮	「梳らせたまふ」は侍女に梳らせる使役＋尊敬とも二重尊敬とも取れるが、いずれでも敬意は作者→中宮。
29	（会話文中の丁寧）「いま参り候ふ」	話し手 → 聞き手	「候ふ」丁寧。話し手が聞き手を敬う。
30	（地の文）中宮、御覧ず。	作者 → 中宮	尊敬語。動作主の中宮を、作者が敬う。
31	（地の文）法皇、御使ひを遣はす。	作者 → 法皇	「遣はす」（尊敬）。動作主を敬う。
32	（会話文）「我れも参らんと申し侍り」	「参ら」話し手 → 参上先の貴人／「申し」話し手 → 申し上げる相手／「侍り」話し手 → 聞き手	「申す」（謙譲）→受け手、「侍り」（丁寧）→聞き手。
33	（手紙文）「君のおほせのこと、承りて侍り」	「承り」書き手 → 承る相手（君）／「侍り」書き手 → 読み手	手紙文では発信者は書き手、丁寧は読み手への敬意。
34	（会話文）「さやうに仕うまつるべきやうにても侍らず」	「仕うまつる」話し手 → お仕えする対象／「侍ら」話し手 → 聞き手	「仕うまつる」（謙譲）＋「侍り」（丁寧）。
35	（地の文）院、御文を遣はす。	作者 → 院	「遣はす」（尊敬）。動作主を敬う。
36	（地の文）「まかり出で侍りなむ」と申しけり。	「まかり」話し手 → 御前の貴人（退出元）／「侍り」話し手 → 聞き手／「申し」作者 → 申し上げる相手	「まかり出づ」＝御前から退出する謙譲。敬意は退出元の貴人へ。

37	(地の文) 入道殿、このことをいとねたく思しめしけり。	作者 → 入道殿	「思しめす」(尊敬)。
38	(地の文) 大臣、御文を奉る。	作者 → 御文の受け手(高貴な人)	地の文の謙譲語。動作の受け手(御文を差し上げる相手)を作者が敬う。

給ふ 次の傍線部「給ふ」を識別せよ。

39 春宮（とうぐう）、文読み <u>給ふ</u> 。	四段活用・尊敬の補助動詞「給ふ」	主語「春宮」（皇太子・貴人）、終止形「給ふ」は四段。
40 思ひ <u>給ふれ</u> ど、口には出ださず。 次の傍線部「給ふれ」を識別せよ。	下二段活用・謙譲の補助動詞「給ふ」	已然形「給ふれ」は下二段。
41 帝、御衣（おんぞ）を脱ぎて <u>給ふ</u> 。	本動詞「給ふ」（お与えになる）	直前は「脱ぎて」で、別の動作のあと改めて「給ふ」。
42 入道殿、双六（すごろく）打ち <u>給ふ</u> 。	四段活用・尊敬の補助動詞「給ふ」	主語「入道殿」（貴人）、終止形「給ふ」は四段。
43 心のうちに思ひ <u>給ふれば</u> 、いとほし。 次の傍線部「給ふれ」を識別せよ。	下二段活用・謙譲の補助動詞「給ふ」	已然形「給ふれ」は下二段。
44 帝、御手づから杯を <u>給ふ</u> 。	本動詞「給ふ」（お与えになる）	体言「杯を」＋給ふで、動詞連用形に付かない。
45 親王（みこ）、馬に乗り <u>給ふ</u> 。	四段活用・尊敬の補助動詞「給ふ」	主語「親王」（貴人）、終止形「給ふ」は四段。
46 見 <u>給ふれ</u> ども、それとも分かず。 次の傍線部「給ふれ」を識別せよ。	下二段活用・謙譲の補助動詞「給ふ」	已然形「給ふれ」は下二段。
47 大臣、われに位を <u>給ふ</u> 。	本動詞「給ふ」（お与えになる）	体言「位を」＋給ふで、動詞連用形に付いていない。
48 主上（うへ）、うなづき <u>給ふ</u> 。	四段活用・尊敬の補助動詞「給ふ」	主語「主上」（帝）、終止形「給ふ」は四段。
49 げに見 <u>給ふる</u> に、あはれなり。 次の傍線部「給ふる」を識別せよ。	下二段活用・謙譲の補助動詞「給ふ」	連体形「給ふる」は下二段。
50 大君、笛を人に <u>給ふ</u> 。	本動詞「給ふ」（お与えになる）	直前が体言「笛を」で動詞連用形ではない。

参る 次の傍線部「参る」を識別せよ。

51 御几帳（きちやう）のもとに <u>参る</u> 。	本動詞・謙譲「参る」（参上する）	直前「もとに」は目的地の体言＋格助詞。
52 ねんごろに弔（とぶら）ひ <u>参らす</u> 。 次の傍線部「参らす」を識別せよ。	補助動詞・謙譲「参らす」（～申し上げる）	「弔ひ」は四段「弔ふ」連用形。
53 御箸（はし）とりて御物 <u>参る</u> 。	本動詞・尊敬「参る」（召し上げる）	「御物」は食事。主語が貴人で「食ふ」の尊敬＝「召し上がる」。

54	御消息（せうそこ）を <u>参らせ</u> たり。 次の傍線部「参らせ」を識別せよ。	本動詞・謙讓「参らす」（差し上げる）	「参らせ」は「参らす」連用形。
55	法皇（ほふわう）の御所に <u>参る</u> 。	本動詞・謙讓「参る」（参上する）	直前「御所に」は目的地の体言＋格助詞。
56	経（きやう）を読み <u>参らす</u> 。 次の傍線部「参らす」を識別せよ。	補助動詞・謙讓「参らす」（～申し上げる）	「読み」は四段「読む」連用形。
57	帝、御酒を <u>参る</u> 。	本動詞・尊敬「参る」（召し上がる）	主語が帝＝「召し上がる」（尊敬の本動詞）。貴人に差し上げる意（謙讓）の「参る」と区別。
58	玉（たま）を <u>参らせ</u> けり。 次の傍線部「参らせ」を識別せよ。	本動詞・謙讓「参らす」（差し上げる）	「参らせ」は「参らす」連用形。

奉る 次の傍線部「奉る」を識別せよ。

59	御衣（おんぞ）を脱ぎて <u>奉る</u> 。	本動詞・謙讓「奉る」（差し上げる）	「脱ぎて」の後、改めて「奉る」。
60	御志（こころざし）深く頼み <u>奉る</u> 。	補助動詞・謙讓「奉る」（～申し上げる）	「頼み」は四段連用形。連用形＋奉るで補助動詞。
61	御料（れう）の御衣（おんぞ） <u>奉る</u> 。	本動詞・尊敬「奉る」（お召しになる）	直前「御衣」は衣服。「着る」の尊敬＝「ご料のお召し物をお召しになる」。
62	御衣（おんぞ）を縫ひて <u>奉る</u> 。	本動詞・謙讓「奉る」（差し上げる）	「縫ひて」の後、物（御衣）を差し出す本動詞。
63	御衣（おんぞ）ひきかづき <u>奉る</u> 。	補助動詞・謙讓「奉る」（～申し上げる）	「ひきかづき」は四段「ひきかづく」連用形。
64	寒ければ、御衣（おんぞ）かさねて <u>奉る</u> 。	本動詞・尊敬「奉る」（お召しになる）	寒くて自分が着る文脈＝「着る」の尊敬語。差し上げる相手がいれば謙讓。
65	宝物（たからもの）を <u>奉る</u> 。	本動詞・謙讓「奉る」（差し上げる）	差し出す物「宝物を」が直前。
66	御几帳（きちやう）引き寄せ <u>奉り</u> て。 次の傍線部「奉り」を識別せよ。	補助動詞・謙讓「奉る」（～申し上げる）	「引き寄せ」は下二段連用形。

侍り・候ふ 次の傍線部「侍る」を識別せよ。

67	鬼ある所となむ人申し <u>侍る</u> 。	補助動詞・丁寧「侍り」（～です／～ます）	「申し」は連用形。連用形＋侍る（連体形）で補助動詞。
68	御返事（かへりごと） <u>候ふ</u> 。 次の傍線部「候ふ」を識別せよ。	本動詞・丁寧「候ふ」（あります）	直前「御返事」は体言。単独で「あり」の丁寧＝「お返事がございます」。
69	一の谷の軍（いくさ）破れ <u>候ひぬ</u> 。 次の傍線部「候ひ」を識別せよ。	補助動詞・丁寧「候ふ」（～です／～ます）	「破れ」は下二段「破る」連用形。

70	この程（ほど）は、京に <u>侍り</u> 。	本動詞・丁寧「侍り」（おります）	丁寧の本動詞「侍り」（終止形）＝おります。
71	かやうの事をのみ思ひ <u>侍り</u> 。	補助動詞・丁寧「侍り」（～です／～ます）	「思ひ」は連用形。連用形＋侍るで補助動詞。
72	御消息（せうそこ） <u>候ふ</u> 。 次の傍線部「候ふ」を識別せよ。	本動詞・丁寧「候ふ」（あります）	直前「御消息」は体言。単独で「あり」の丁寧＝「お便りがございます」。
73	御伴（とも）に参り <u>候ふ</u> 。 次の傍線部「候ふ」を識別せよ。	補助動詞・丁寧「候ふ」（～です／～ます）	「参り」は連用形。連用形＋候ふで補助動詞。
74	をかしき事も <u>侍り</u> き。 次の傍線部「侍り」を識別せよ。	本動詞・丁寧「侍り」（あります・ございます）	「侍り」＋過去「き」。直前は体言「事」＋係助詞「も」で連用形がないので、存在を丁寧に述べる本動詞（「あり」の丁寧）。

最高敬語

75	帝、行幸して <u>おはしまして</u> 、御覧ず。 次の傍線部「おはしまして」は、ア～オのどれか。 ア 二重尊敬 / イ 単体の最高敬語 / ウ 使役+尊敬 / エ 二方面敬語 / オ その他の普通の敬語	イ	「おはします」の連用形。
76	大納言、中宮に <u>申し給ふ</u> 。 次の傍線部「申し給ふ」は、ア～オのどれか。 ア 二重尊敬 / イ 単体の最高敬語 / ウ 使役+尊敬 / エ 二方面敬語 / オ その他の普通の敬語	エ	「申し（謙譲）+給ふ（尊敬）」。
77	中宮、女に琴を <u>弾かせ給ふ</u> 。 次の傍線部「弾かせ給ふ」は、ア～オのどれか。 ア 二重尊敬 / イ 単体の最高敬語 / ウ 使役+尊敬 / エ 二方面敬語 / オ その他の普通の敬語	ウ	「女に」という使役の対象がある。
78	中宮、をかしと <u>笑はせ給ふ</u> 。 次の傍線部「笑はせ給ふ」は、ア～オのどれか。 ア 二重尊敬 / イ 単体の最高敬語 / ウ 使役+尊敬 / エ 二方面敬語 / オ その他の普通の敬語	ア	「笑は+せ（尊敬）+給ふ」。
79	中將、ただ今こそ <u>おはすれ</u> 。 次の傍線部「おはす」は、ア～オのどれか。 ア 二重尊敬 / イ 単体の最高敬語 / ウ 使役+尊敬 / エ 二方面敬語 / オ その他の普通の敬語	オ	「おはす」単体は普通の尊敬語。
80	帝、内裏には <u>おはしまさず</u> 。 次の傍線部「おはしまさず」は、ア～オのどれか。 ア 二重尊敬 / イ 単体の最高敬語 / ウ 使役+尊敬 / エ 二方面敬語 / オ その他の普通の敬語	イ	「おはします」の未然形+打消「ず」。
81	女御、帝に御琴を <u>奉り給ふ</u> 。 次の傍線部「奉り給ふ」は、ア～オのどれか。 ア 二重尊敬 / イ 単体の最高敬語 / ウ 使役+尊敬 / エ 二方面敬語 / オ その他の普通の敬語	エ	「奉り（謙譲）+給ふ（尊敬）」。

82 帝、臣下に詔を<u>書かせ給ふ</u>。 次の傍線部「書かせ給ふ」は、ア～オのどれか。 ア 二重尊敬 / イ 単体の最高敬語 / ウ 使役+尊敬 / エ 二方面敬語 / オ その他の普通の敬語	ウ	「臣下に」という使役の対象がある。
---	---	-------------------

二方向 次の傍線部「侍り」は、ア～エのどれか。

83 后、帝の御前に<u>参り給ふ</u>。 次の傍線部「参り給ふ」は、ア～エのどれか。 ア 二方向敬語（謙譲+尊敬） / イ 尊敬語のみ / ウ 謙譲語のみ / エ 丁寧語	ア	参り（謙譲＝帝へ）+給ふ（尊敬＝后へ）。
84 大臣、座を<u>立ち給ふ</u>。 次の傍線部「立ち給ふ」は、ア～エのどれか。 ア 二方向敬語（謙譲+尊敬） / イ 尊敬語のみ / ウ 謙譲語のみ / エ 丁寧語	イ	「立ち（一般の動詞）+給ふ（尊敬）」。
85 翁、帝に玉の枝を<u>奉る</u>。 次の傍線部「奉る」は、ア～エのどれか。 ア 二方向敬語（謙譲+尊敬） / イ 尊敬語のみ / ウ 謙譲語のみ / エ 丁寧語	ウ	「奉る」は謙譲語（受け手＝帝へ）。
86 「かかる事も、世には<u>侍り</u>」と語る。 ア 二方向敬語（謙譲+尊敬） / イ 尊敬語のみ / ウ 謙譲語のみ / エ 丁寧語	エ	「侍り」は丁寧語（聞き手への敬意）。
87 中納言、帝に事の由を<u>申し給ふ</u>。 次の傍線部「申し給ふ」は、ア～エのどれか。 ア 二方向敬語（謙譲+尊敬） / イ 尊敬語のみ / ウ 謙譲語のみ / エ 丁寧語	ア	申し（謙譲＝帝へ）+給ふ（尊敬＝中納言へ）。二方向の敬語。
88 院、来し方をあはれと<u>思す</u>。 次の傍線部「思す」は、ア～エのどれか。 ア 二方向敬語（謙譲+尊敬） / イ 尊敬語のみ / ウ 謙譲語のみ / エ 丁寧語	イ	「思す」は尊敬語（動作主＝院へ）。
89 翁、姫に思ふことを<u>申す</u>。 次の傍線部「申す」は、ア～エのどれか。	ウ	「申す」は謙譲語（受け手＝姫へ）。

ア 二方向敬語（謙譲＋尊敬）／ イ 尊敬語のみ／ウ 謙譲語のみ ／エ 丁寧語		
90 「げに、ことわりに<u>侍り</u>」と 申しけり。 ア 二方向敬語（謙譲＋尊敬）／ イ 尊敬語のみ／ウ 謙譲語のみ ／エ 丁寧語	エ	「侍り」は丁寧語（聞き手への敬意）。

絶対敬語 次の傍線部「啓す」は、ア～エのどれか。

91 女房、東宮に事のよしを<u>啓す</u>。 ア 奏す（絶対敬語＝申し上げる）／イ 啓す（絶対敬語＝申し上げる）／ウ 相对敬語（申す・聞こゆ・奉る 等）／エ 奏す（＝楽器を 演奏する）	イ	絶対敬語「啓す」。相手は東宮。
92 大臣、世の有様を帝に<u>奏す</u>。 次の傍線部「奏す」は、ア～エのどれか。 ア 奏す（絶対敬語＝申し上げる）／イ 啓す（絶対敬語＝申し上げる）／ウ 相对敬語（申す・聞こゆ・奉る 等）／エ 奏す（＝楽器を 演奏する）	ア	言葉を申し上げる「奏す」。
93 笛をいとめでたく<u>奏す</u>。 次の傍線部「奏す」は、ア～エのどれか。 ア 奏す（絶対敬語＝申し上げる）／イ 啓す（絶対敬語＝申し上げる）／ウ 相对敬語（申す・聞こゆ・奉る 等）／エ 奏す（＝楽器を 演奏する）	エ	目的語が「笛」。「演奏する」意で敬語ではない。
94 女、男に忍びて<u>聞こゆ</u>。 次の傍線部「聞こゆ」は、ア～エのどれか。 ア 奏す（絶対敬語＝申し上げる）／イ 啓す（絶対敬語＝申し上げる）／ウ 相对敬語（申す・聞こゆ・奉る 等）／エ 奏す（＝楽器を 演奏する）	ウ	「聞こゆ」は相对敬語。相手（男）は文脈で決まる。
95 大夫、皇后に賀の言葉を<u>啓す</u>。 ア 奏す（絶対敬語＝申し上げる）／イ 啓す（絶対敬語＝申し上げる）／ウ 相对敬語（申す・聞こゆ・奉る 等）／エ 奏す（＝楽器を 演奏する）	イ	絶対敬語「啓す」。相手は皇后。

自尊敬語

次の傍線部「御覧ず」は、ア～ウのどれか。

96	〔地の文〕女房、御前に <u>参る</u> 。 次の傍線部「参る」は、ア～ウのどれか。 ア 自尊敬語 / イ 通常の尊敬語 / ウ 謙譲語	ウ	「参る」は「行く」の謙譲語。
97	〔地の文〕院、池の汀を <u>御覧ず</u> 。 ア 自尊敬語 / イ 通常の尊敬語 / ウ 謙譲語	イ	地の文で作者が院を高める通常の尊敬語。
98	〔帝の独白〕「われ、この文を <u>御覧ず</u> 」 ア 自尊敬語 / イ 通常の尊敬語 / ウ 謙譲語	ア	帝が独白で、自分の「見る」に尊敬語。
99	〔臣下が〕臣、わびを <u>申す</u> 。 次の傍線部「申す」は、ア～ウのどれか。 ア 自尊敬語 / イ 通常の尊敬語 / ウ 謙譲語	ウ	「申す」は「言ふ」の謙譲語。
100	〔地の文〕帝、楽人を <u>召す</u> 。 次の傍線部「召す」は、ア～ウのどれか。 ア 自尊敬語 / イ 通常の尊敬語 / ウ 謙譲語	イ	地の文で作者が帝の「呼ぶ」を高める通常の尊敬語。